

特 集

人とトキが共に生きる島づくりを目指して

* 渡辺竜五¹

For community development of Sado Island in coexistence of human and ibises

* Ryugo Watanabe¹

¹ Agriculture, Forestry and Fishery Division, Sado Municipal Government, 232, Chikuca, Sado, Niigata Pref. 952-1292, Japan

* E-mail: S3734@city.sado.niigata.jp

2つの危機が契機に

トキとの共生型農業が急速に拡大した背景としては二つの要因がある。一つは農業（水田農業）の危機である。佐渡では2004年台風被害に見舞われ、佐渡米がほぼ出荷できない状態に追いこまれた。結果として販売店、消費者の信頼を失った佐渡米は翌年からトキ放鳥の前年（2007年）まで約20%が売れ残るなどの販売不振となり、また、売れないことによる米の生産調整の強化が進み、水稲作付面積の減少（図1）が始まるとともに、米価の下落も進み、収入の減少と米を作れないダブルパンチなどから水田の耕作放棄地が増加したと考えている（図2）。

また、トキの放鳥に向けても課題と不安に包まれていたと思われる。関係者の多大なる努力もあるものの、トキの放鳥に向けての餌場整備もボランティアや補助金に頼った餌場づくりが限界を迎えており、放鳥前年までは30 ha程度のピオトープ等が設置されていた。しかし、水田の生物多様性を豊かにする餌場づくりは広がりを見せず、60羽のトキの野生定着を目指すためには本当に餌

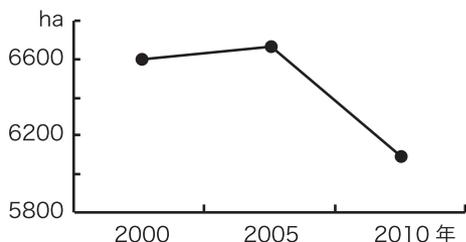


図1. 水稲作付け面積の推移（農林業センサス）。10年間で510 haの減少。

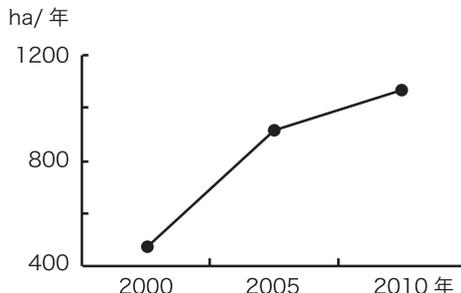


図2. 耕作放棄地の推移。

があるのか、冬期間餌場確保はどうするのかなど不安だらけだった。

トキの餌場の農業の共生を目指すために様々な検討がなされた。佐渡は島であり、ひとつの地域である。トキが佐渡の自然に戻るには、佐渡全体の水田による生態系の多様性（豊かな食物連鎖の再生）が必要であると考えた。あわせて、農業とトキの餌場づくりを島全体で取り組み、佐渡島全体が環境ブランドとなることが、波及効果も大きいと考えた。その結果進められたのが、農業、化学肥料を減らし、より一層の安全・安心な米作りとトキの餌となる小さな生き物の命を育む「生きものを育む農法」を組み合わせた「朱鷺と暮らす郷づくり認証制度」である。

朱鷺と暮らす郷づくり認証制度

佐渡米の生物多様性ブランドによる販売力の強化とトキの餌場づくりを両立することを目的として、認証制度の要件を設計した。

- ①生きものを育む農法を実施すること。
- ②エコファーマー（新潟県が認証する土づくりや減化学肥料・減農薬などの環境に優しい農業に取り組む農業者）の取得。
- ③農薬、化学肥料の5割以上の削減（佐渡では農薬8割減、無化学肥料と無農薬、無化学肥料の栽培が行われています。）が要件となっている。

また、田んぼの生きもの調査を努力要件（2010年より必須項目）としました。この認証制度の最大の特徴は農薬、化学肥料を削減する環境保全型農業にトキの餌となる、水田の生物多様性を育む技術を組み合わせ、「生き

¹ 佐渡市農林水産課
952-1292 新潟県佐渡市千種232
* E-mail: S3734@city.sado.niigata.jp



図3. 生きものを育む農法の4つの技術.

ものを育む農法」とし、稲作と生物多様性を一つの制度にした点だと考えている。

生きものを育む農法は、具体的には、①江(え)の設置、②ふゆみずたんぼ、③魚道の設置、④ピオトープの設置の4つの技術がある(図3)。

一方では経済に循環する仕組みづくりとして、佐渡市も販売に力を入れた。パンフレットや専用米袋(図4)の作成や、市長のトップセールス、首都圏などでのイベント、販売店での店頭PR等実施し、「佐渡産コシヒカリ朱鷺と暮らす郷」を新たな佐渡ブランドとして販売した。2008年に実に27年ぶりに佐渡の空に舞ったトキの試験放鳥も生物多様性をテーマとした米づくりに大きな後押しとなった。トキは水田で餌を採る(図5)ことが佐渡島民だけでなく、日本全国に理解され、消費者の支援が私たちの取り組みと繋がりはじめたのである。

また、佐渡市は農家支援として、佐渡版戸別所得補償制度を策定した。再生産可能な農家所得を確保するために、生きものを育む農法の技術に対して上限10,000円/10aを補てんするものである。

島内での認証制度への取り組みは確実に増加し、6,000haの水稲作付に対し、22%の水田で生きものを育む農法が取り組まれている(表1)。

子供達が自ら生きもの調査を実施している「佐渡 kids 生きもの調査隊」も活発な活動となっており、島内での生きもの調査はもちろん、無農薬のお米栽培や自分たちが育てたお米を販売し、トキの野生復帰への募金に寄付するなど、学び、楽しみながら活動をしている。さらに、宮城県大崎市、兵庫県豊岡市の子供達と東京大学で「世界一田めになる学校」を実施した。田んぼの生きもの大切さや安全・安心が人とトキの共生につながることを首都圏の子供達に発信し、交流も深めている(図6)。

また、知の連携も進んでいる。佐渡市では大学との連携を進めており、トキの野生復帰や認証制度の生物多様



図4. 「朱鷺と暮らす郷づくり認証制度」の専用米袋.



図5. 水田で餌を採るトキ.

表1. 朱鷺と暮らす郷づくり認証制度の推移.

年 度	取組面積 (ha)	農家戸数
2008	427	256
2009	863	510
2010	1,188	651
2011	1,320	693

性への効果などたくさんの大学や学生が佐渡を研究フィールドとして活躍している。特に地元である新潟大学とは包括協定を締結しており(東京農業大学、相模女子大学とも協定締結)、トキ自然再生学研究センターを佐渡に設置し、生きものを育む農法の効果が佐渡島の生物多様性へ与える影響評価、環境保全に取り組む人材の育成などに取り組んでいる。



図6. 子供達の生きもの調査.



図7. 小倉千枚田 (佐渡市旧畑野町小倉).

世界農業遺産への認定

世界的にも農業の持つ生物多様性、伝統、文化は失われており、これらの保全や再生を目的とし国連食糧農業機関 (FAO) が認定するのが世界農業遺産である。主に途上国への支援策として活用されていたが、2011年先進国で初めて佐渡と能登地域が「世界農業遺産」の認定を受けた。

佐渡の農業が認められたポイントは3つある。

- ①トキと共生する農業が生物多様性保全に大きな役割を果たすと共に、消費者や都市と連携し、環境と経済が循環する農業生産体制の構築が農業の持続可能性を高める取り組みであること。
- ②農業・農村が育み続けてきた伝統文化や地域の風習が保全されていること。
- ③棚田 (図7) などの水田とともに地域の自然風景が保全されていること。

農業が支えてきたものは食糧の安全保障だけでなく、能、鬼太鼓などの文化、水田が創る風景などの日本の里山の自然、集落のコミュニティ活動など地域全体であることを改めて認定していただいたものと考えている。

トキだけではなく、守られ続けてきた農業、農村、地域、風景を未来に残すために佐渡が世界から試されている。

世界農業遺産の活用から持続可能な地域づくりへ

佐渡では世界農業遺産プロジェクトアクションプランを作成し、持続可能な生物多様性保全と農業生産体制、伝統文化、美しい自然環境の保全を進めている。また、トキと暮らす島生物多様性佐渡戦略を2012年策定した。90年後に人もトキも小さな生き物達も豊かな暮らせる佐渡作することを目的としている。農業の持続可能性を高め、生物の多様性を育み、一方では里山 (図8) の価値を発信し、農業を軸に観光と環境再生そして経済が循環する仕組みから、生産者と消費者が食の生産や自然風景そして生物多様性への想いが共有できる農業を佐渡で実現していきたいと考えている。



図8. 世界農業遺産に登録された佐渡の棚田の案内資料.

(2012年12月15日受理)